ゴジラ起源考

A Consideration of the Origin of the Godzilla (1954 film)

犬塚　康博
INUDZUKA Yasuhiro

要旨　ゴジラ映画は、1954年の１作目ののち30作品近くが公開され、多くの観客を動員してきた。また、ゴジラ論もよくおこなわれてきた。本論は、香山滋の原作「G作品検討用台本」を中心に、ゴジラの起源を考察した。その結果、原作にある、熱河省、元北京大学教授、大戸島と、映画のシーンに見えるゴジラの足跡、トリロバイトを手がかりに、ゴジラが1930年代から1940年代前半の満洲国における地質古生物学の「栄光」に内在するものであった可能性を導いた。くわえて、映画製作への地質古生物学者の関与を詮索し、さらにゴジラの物語に明暗の構造があること、登場人物山根恭平にも明暗の構造があり、明暗の展開が原作とそれ以外とでは異なることを示した。その上で、従来のゴジラ論を批判的に検討し、原作者のゴジラが「北」を起源にして「南」からあらわれ「北」に消えたことを結論するとともに、そこに「自然史の存在」としてのゴジラの完全を見た。

はじめに

1954年に映画『ゴジラ』が封切られてから、60余年が経つ。この間、本論脱稿後に公開される新作を含め、29作品が製作されてきた。2016年以降の計画もあると聞く。ハリウッドにまで進み、時代、地域を越えてゴジラは受容されてきた。そのたびにゴジラは、変容もしている。１作目のゴジラは死滅したにもかかわらず、別の個体をして２作目がおこなわれたように、その都度の合理性のもとで変わりながら継続して来た。

半世紀余のあいだ、ゴジラがどのように変わってきたかは、興味深いテーマである。すなわちそれは、ゴジラに表象された人びとの物質と精神とが、どのように移ろってきたかを問うことに等しい。今後のゴジラの変容についても同然である。変わり果ててゆく私たち自身への問いとなるだろう。

変容を言いつつ、「時代、地域を越えて」と書いた。ゴジラは、個体を変えながら、時間、空間を超える生である。それは、人びとから見られてもいる。その点においてゴジラは、天皇に近しいのかもしれない。万世一系のフィクションと、ゴジラの長寿、不老不死、ロングセラーは、構造が似る。

本論は、そうしたゴジラの起源について考えようとするものである。これは、満洲国および日本の博物館研究の途上で[1)]、筆者が遭遇し想い到ったことがらにもとづいている。ゴジラの来し方に関するささやかな検討が、ゴジラの行く末のよすがになれば望外の喜びである[2)]。

１．ゴジラ論

最初に、これまでのゴジラ論を概観しておきたい。ゴジラ論は、ゴジラの事実を記述するそれと、ゴジラを解釈し批評するそれとに括ることができる。

まず、特撮映画の研究と、ゴジラ原作者・香山滋の作品を収集し解説してきた竹内博のしごとが重要である。ゴジラの事実学は、竹内の研究を核として、ゴジラ映画製作関係者の証言などを記録しながら形成されてきた。

一方、事実を超えたところでの批評が、たいへんよくおこなわれてきたことも、ゴジラ論の特徴である。それは、「「ゴジラ」に姿をかりている原・水爆」と定義し、「私も、その運動（原水爆禁止運動のこと―引用者注）のひとつとして、小説の形式で参加したのが、この物語です[3)]」と香山自身が言うように、あらかじめ社会批評が埋め込まれていたことがはたらいているのであろう。

そして、原水爆実験とそれへの反対運動という1950年代半ばのコンテクスト――直前には1945年の広島・長崎への原爆投下と敗戦があることは言うを俟たない――が、2011年３月11日の東日本大震災（地震、津波、余震、福島第一原子力発電所事故等）に接続し、批評としてのゴジラ論をあらためて顕現させたのは記憶に新しい。川本三郎、武田徹、赤坂憲雄、加藤典洋らを引きながらおこなわれた、笠井潔の所論に登場するキイワードは、戦没兵士、戦艦大和沈没、戦死者の亡霊、ビキニ水爆実験、第五福竜丸、広島、長崎、東京大空襲、皇居などであった[4)]。戦死者や広島、長崎を斥けながら、第五福竜丸と東京大空襲を象徴する、戦争映画としてゴジラを見る山田正紀もいた[5)]。論者によって異同はあるものの、また多少の誤差はあるかもしれないが、「1945年３月から1954年３月、日本およびその南方の海域」が、ゴジラ解釈のいずる時間、空間と、概括することができる。このうち戦没兵士、戦死者一般はこの時空に限られないが、笠井において、川本による「沈んでいく戦艦大和」「〝海からよみがえってきた〟戦死者の亡霊[6)]」から立論されていたため、この整理に大過ない。

これらが、ゴジラに外在的な事項を援用しながらゴジラを解釈してゆくのに対して、ゴジラに内在してゴジラと格闘するゴジラ論があった。高橋敏夫の一連のそれである[7)]。高橋のゴジラ論の最初の著書は、そのあとがき冒頭で「はたして、ここで、見慣れたゴジラが見慣れないゴジラになったであろうか[8)]」と書いていた。「見慣れたゴジラ／見慣れないゴジラ」にあきらかなように、高橋はつねに二項を構え、その矛盾においてゴジラを思考した。説明するゴジラ論、解釈するゴジラ論でなかったのが、高橋のそれである。弁証法のレッスンをしているかのようであった。

ゴジラ論のすべてに接していないが、おおよそ以上のような、事実の記述、解釈、思考として、現在もなお進化あるいは退化しつつ継続しているものと思われる。

２．G作品検討用台本

熱河省

「「G作品検討用台本」は、映画「ゴジラ」のために書き下ろされた、厳密な意味での原作である。総てはここから始った[9)]」と、竹内博は書いた。本論は、その「G作品検討用

台本」（以下、原作と称する）を中心にすえて、検討をおこなってゆく。

映画『ゴジラ』に関する香山滋の作品は、ほかに『怪獣ゴジラ』（岩谷書店、1954年）と、映画を小説化した『ゴジラ』（島村出版株式会社、1955年、同書の「東京編」を、以下、東京編と称する）があり、必要に応じてこれらを参照した。

さて、原作に次の文章がある。

> 芹沢大助の家。
> 元北京大学教授、薬物化学者で山根恭平とは親交が深い。嘗て、大学の休暇を利用して熱河省へ山根が化石採掘に行ったとき、助手として同伴。狼におそわれた危い間際を山根恭平に救われたので山根を命の恩人と思っている。その際、片目を失い、顔半面ひどい傷のヒッツリで醜い。妻は数年前病死、ひそかに恵美子を慕っているがあきらめている。恵美子もそれはうすうす知っている[10]。

あらかじめ言うと、芹沢の顔の状況は、映画では実験によるもの[11]、東京編では戦争によるものとされ[12]、後者を受けて以後のゴジラ論が戦争の表徴としていった観があるが、原作では戦争の影も形もなかった。原作とは、このようにして世人の期待、空想を裏切るものなのかもしれない。その逆に、思いがけない示唆もある。注意されるのが、熱河省での化石採掘のくだりである。

熱河省は、原作が書かれる前の1932年から1945年まで、満洲国の一省だった地域である。中生代の地層が発達し、淡水産魚類、甲虫類、淡水産甲殻類、植物の化石など多くを産出することで知られ、清の乾隆帝も化石を発掘していた[13]。

恐竜化石

ところで、満洲における恐竜化石は、黒竜江（アムール川）支流の烏雲河の畔でロシア人によって1914年に報告され、1916年から1917年にかけて発掘された満洲竜 *Mandschurosaurus* が周知であった。その後満洲国時代になると、熱河省の文珠竜 *Monjurosuchus splendens*、東洋吻嘴竜 *Rhynchosaurus orientalis*、矢部竜 *Yabeinosaurus tenuis* が知られるようになり[14]、熱河省東の錦州省では、1939年に足跡化石群が発見、調査されて、熱河竜 *Jeholosauripus* と命名されている[15]。

1945年以前における日本人地質古生物学者の恐竜体験には、1934年、樺太の川上炭坑地内から発見された日本竜 *Nipponosaurus sachalinensis* が有名だが、これに続くものとして満洲国の恐竜はあった。日本竜の研究にたずさわった北海道帝国大学理学部地質学鉱物学教室創設教授・長尾巧は、東北帝国大学理学部地質学古生物学教室創設教授・矢部長克の門下であり、満洲国の恐竜研究も矢部一門の遠藤隆次、野田光雄、鹿間時夫らによって進められている。1930年代から1940年代前半は、日本の地質古生物学における恐竜研究の高度成長期だったのである。

そして香山滋は、地質古生物学を趣味とする人であった[16]。香山は、満洲国で発見された恐竜化石の報告に、リアルタイムで接していたのではないだろうか。満洲国国立中央博物館（以下、国立中央博物館と称する）の『国立中央博物館時報』や『満洲帝国国立中央博物館論叢』はそこになかったとしても、国内の刊行物で知ることができたと思われ

る[17]。熱河は、香山のほかの作品にも見られ、ゴジラの原作に登場するのを知るとき、香山の地質古生物学に対する造詣のいかんがわかるとともに、恐竜を媒介項にした「ゴジラ—恐竜—熱河省」という、ゴジラの存在論的ゆえんに想到しもするのである。

もちろん、まったくの作りものの可能性が、ゴジラにないわけではない。しかし、「ぼくが、小説を書く上での、たのしみのひとつは、架空の動物を創造することである[18]」と言う香山がいる一方で、「『オラン・ペンデク』なる矮小人間も、でっちあげられた架空生物だと見られる虞れが多分にあるが、多少の潤色はほどこしてあるが、これは現実に、いまもスマトラの奥地に生存しており、その幾体かの標本は、オランダの国立博物館に秘蔵されている[19]」として、架空でない場合のあることを言う。ゴジラに関する直接の言及はないが、「この種の空想科学物語を、小説として手がけたのは、しかしこれ（ゴジラのこと—引用者注）が初めてではありません[20]」として、シーラカンス、北京原人、オラン・ペンデクを扱った作品を挙げ、自身の作品のなかで「一聯の系列[21]」である旨も書きつけていた。ゴジラは、架空でなかったのである。

元北京大学教授

芹沢が北京大学教授であったことからは、つぎの理解が得られる。原作で芹沢は、40歳の設定であった[22]。1914年生まれとなり、順調に進学すると1936年に大学を卒業する。現実に置くと、これ以降に北京大学の職を得たであろうから、1937年の盧溝橋事件以降、従前の北京大学が日本の中国侵略を避けて、長沙に移転する前後のことになる。1946年10月、北京に同大学が戻る以前に、汪兆銘政権下で開学した同名の大学があるため、時期的にはこれが該当する。戦後の留用も考えられるが、山根にともなって熱河省へ化石採集にゆくことを踏まえれば、それは戦後の混乱期と言うよりは、1945年以前が妥当である。

山根のプロフィール「元北京大学教授、引揚後、引退して研究に没頭しているやもめ。研究のこととなると半気狂とおもわれるほど偏執的である。だが、ひとり娘の恵美子には、やさしい世間並みの老父親[23]」も、参考になる。引き揚げであるため、山根は敗戦を中国で迎えている。特別な事由がないかぎり、芹沢も同様だったと見てよい。

先の「ゴジラ—恐竜—熱河省」の右翼には、満洲国（ならびに汪兆銘政権—以下、省略する）、総じて日本の中国侵略が接続して、ゴジラの存在つまり理由性動機を形成するのである。

大戸島

ところで大戸島は、原作、『怪獣ゴジラ』、映画、東京編のいずれにも同名で登場する。船舶が遭難する場所の経緯度もほぼおなじで、最寄りの港が大戸島とされ、同島の場所もおなじであっただろう。『怪獣ゴジラ』には、「小笠原南端[24]」が明記されていた。ちなみに、原作が指す北緯24度東経141度は、現実の南硫黄島西南西約49.5 kmの地点にあたる。

原作とそのほかとで異なるのは、たとえば東京編でゴジラは、日本語を母語とする島民自身の「昔の云い伝え[25]」であるのに対して、原作では「この島の土人の伝説[26]」として、日本語を話す島民から客体化されている点である。「奴らのいうゴジラちゅう化け物はな、わしらのいう海坊主と同じ作り話じゃよ[27]」にあきらかなように、「奴ら／わしら」の二項がある。「はやくも噂（ゴジラ出現の—引用者注）を聞き伝えたか、土人部落から、祈

禱の合唱が太鼓を交えて、きこえてくる[28)]」からは、その前近代的な雰囲気も醸されていた。このように原作で大戸島は、土人と土人でない人からなるふたつの集団が暮らす島として描かれていたのである。

複数の社会を舞台にした作品は、香山滋にはよく見られる。ゴジラにかぎって言うと、原作の大戸島は「本州の東南、太平洋上に浮ぶ一孤島[29)]」であったから、最大限、旧南洋庁が統治した地域の島が想起され、『怪獣ゴジラ』の「小笠原南端」に即せば、最小限、日本人が移住する前から日本語を母語としない先住者の社会があった小笠原諸島となる。いずれの地域も、1954年の映画製作時は日本に主権がないため、原作の大戸島は、戦前の社会を背景に有する発想のもとにあったことが考えられ、上に見た「「ゴジラ―恐竜―熱河省」―満洲国」との歴史的、社会的整合性が了解できるのである。ただし、『怪獣ゴジラ』以降、大戸島の社会構成が一重化されたため、原作の戦前的自明性は忘れられてゆく。

３．足跡とトリロバイト

足跡

映画『ゴジラ』では、ゴジラの被害を受けた大戸島を、山根、恵美子、尾形らがおとずれ、ゴジラの足跡と三葉虫を認める場面に注意がゆく。

最初に登場する足跡は、接近しすぎていてわかりにくいが、ゴジラがはじめて人びとの前に姿をあらわし、海へ消えたあとのシーンで、全体のようすを知ることができる。砂浜に、四指性、二足歩行の足跡と、両の足跡のあいだに尾を引きずってできたと思われる大きく蛇行する条線が残されていた[30)]。

ゴジラの設定は、水爆実験であらわれた恐竜である。恐竜の足跡化石の、日本人にとって直接かつ最初の体験と言えば、前章で見た熱河竜であった。それは、後方に一指、前方に三指の足跡で、尾の痕跡は認められていない。

原作では、この場面を次のように書いている。山根は、神経痛を理由に大戸島には行っていない。

> 怪物ゴジラの足跡、多数発見。その中のひとつに、奇妙な形の生物の死骸が落ちている。エビともカニともつかぬ舟虫を大きくしたようなもの（三葉虫（トリロバイト））[31)]。

映画では一列の足跡であったが、原作で足跡は「多数」となっている。「多数」の語の背景にも、「259平方米中に約4000の足跡[32)]」が推測された熱河竜の存在が感じられる。映画の四指は、作られたゴジラのぬいぐるみに由来したのであろう。

トリロバイト

そして、満洲国との有縁を示してあまりあるのが三葉虫である。1954年以前、1930年代および1940年代における日本人地質古生物学者で、古生代研究、三葉虫研究の第一人者のひとりに遠藤隆次がいた。

1892年生まれの遠藤は、1924年に東北帝国大学理学部地質学古生物学教室を出ると、満洲にわたって南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と称する）立の撫順中学校教諭となり、以

後20余年におよぶ満洲・中国生活を開始する。1927年に満洲教育専門学校教授、1929年４月から1931年６月までのスミソニアン・インスティテューション留学をはさんで、1933年には満鉄教育研究所教授となる。同所は、1937年12月１日、満鉄附属地行政権の満洲国移譲によって地方部とともに廃止され、同所附属教育参考館も1938年５月１日に満洲国に移って、館長の遠藤はこれにともなった。同館は国立中央博物館籌備処となり、新京移転後の1939年１月１日に国立中央博物館官制が施行された。遠藤は、満洲国終焉まで同館自然科学部長の地位にあり、敗戦後は1946年８月から1948年６月まで留用されて奉天の東北大学教授を務めたのち、引き揚げている[33)]。

遠藤の満洲古生代研究は、満鉄に所属した時代に集中しておこなわれた。これを含めた成果は、1937年に、スミソニアン・インスティテューションのチャールズ・エルマー・レッサーとの連名で、教育参考館の研究紀要第１巻すべてをあてた大部の１冊として著されている[34)]。遠藤の化石コレクションは、最初、教育参考館[35)]に、次に国立中央博物館[36)]へと、遠藤その人とともに移っていった。

三葉虫は示準化石であり、発見例も多い。したがって、恐竜足跡化石のような化石それじたいの新規性、稀少性はない。注意されるのは、第一に遠藤が、満洲における震旦系およびカンブリア紀研究に長じていたこと。第二に、それがカンブリア紀研究の泰斗でスミソニアン・インスティテューション会長、米国地質調査所所長のチャールズ・ドリトル・ウォルコットのアシスタントだったレッサーとの２年間の研究に裏づけられたものであったことである。これらの点において、遠藤には卓越性があった。スミソニアン・インスティテューションでの留学を終えた遠藤は、満洲オルドビス紀研究の論文をまとめるが、それを学位請求論文にするようにと、指導教官の矢部長克が遠藤に指導したことからもうなずける[37)]。ちなみに、レッサーとの共同は、当初ウォルコットが遠藤の指導をする予定だったものが、遠藤の渡米前にウォルコットが死去したことによるものであった。

ゴジラの足跡と三葉虫を前景化するこのシーンは、一瞬ではあったが、満洲国との有縁を暗示していたのである[38)]。

４．地質古生物学者とゴジラ

鹿間時夫と尾崎博

さて、東宝の怪獣映画製作には、地質古生物学者の関与が知られている。鹿間時夫は、「ラドン撮影の時、古生物学者の研究室というものをどうしたら良いか、またラドンの模型をどうしたら良いか東宝からお座敷がかかり、円谷監督に会ったことがある[39)]」と書いている。『空の大怪獣ラドン』は、1956年公開の映画であった。

東北帝国大学理学部地質学古生物学教室出身の鹿間は、戦前、新京工業大学教授を本務とし、1942年10月１日までは国立中央博物館の嘱託、それ以降同館兼任学芸官を務めた人である。熱河竜の足跡化石を師・矢部長克らと報告し[40)]、国立中央博物館学芸官・野田光雄とともに現地におもむき収集をおこなっている[41)]。

やはり、東北帝国大学理学部地質学古生物学教室出身で、満鉄の地質調査所から満洲鉱山株式会社へと進み、1947年に引き揚げて1950年から国立科学博物館地学課長を務めた尾崎博は、「映画のゴジラは、本館の恐竜の模型などを参考にして、つくられたものであるが、

これも生物の進化に対する関心を高めたと思う[42)]」と述べていた。1962年まで同館に在籍した尾崎は、1954年に理工学館が竣工し理工系の展示が移転したあとの本館101号室を、「生物の進化――魚から哺乳類まで――」をテーマとする展示に更新する際[43)]、地学分野の中心的な役割をになっている。地質時代各期の壁画と模型など展示更新は一気におこなわれたものではなかったらしく「ひととおり揃うまでに 5 年も 7 年もかかった[44)]」と言うため、ゴジラの原作が書かれたころ、国立科学博物館の恐竜模型に何があったのかはさだかでない。上掲引用文中の「映画のゴジラ」とは、東宝の怪獣映画一般の意だったかもしれない。いずれにしても、当時国立科学博物館の尾崎を中心にして恐竜の復原が進められており、そうした状況が同時代の原作を規定していたであろうことはうなずけるところである。

さらに尾崎は、国立科学博物館が「生物の進化」展示をつくるころの、「ダーウィンの進化論や人類の起源と進化を主題にした展覧会が、デパートの企画として取り上げられ、しかも例外なく大衆を吸い寄せるようになり、恐竜が幼児の絵本にまでも頻々と現われるようになった[45)]」社会現象を指摘していた。この文章に接するとき、山根のゴジラ定義を想い起こす。

> ゴジラは、侏羅紀（じゅらき）から、次の時代白亜紀にかけて、極めて稀（ま）れに生息していた、海棲爬虫類から、陸生獣類に進化しようとする過程にあった中間型の生物であったと見て差支えありますまい[46)]。

ここには、尾崎が記した当時のブームとでも言うべき「ダーウィンの進化論や人類の起源と進化」が反映しているように見える。さらにことばの形態学からは、国立科学博物館の副題「魚から哺乳類」と、ゴジラの「海棲爬虫類から、陸生獣類」との類似も言いうる。

そして尾崎は、展示「生物の進化」の壁画の苦労に触れて、「爬虫類時代の最後は後期白亜紀にいたヘスペオルニスという翼のない鳥が泳いでいる湖の風景で、哺乳類時代の最初は、北アフリカのメリス湖から、最古の象メリテリウムが上がってくるところになっていた[47)]」と書いてもいた。ここにあるのは、海（湖）から陸へ、である。このように、尾崎および国立科学博物館と香山は、よく同期するのであった。

遠藤隆次

ところで、尾崎博と鹿間時夫の先輩の遠藤隆次は、ゴジラにかかわっていなかったのだろうか。 2 章でみた満洲国の恐竜、 3 章の三葉虫および古生代は、場所性、時間性において遠藤の研究とほぼ重なっている。両名に先行する遠藤であったから、かかわらない理由はなかったように思えてならない。遠藤は、熱河竜の足跡化石について、論文などの調査研究過程の前面にいなかったが、師・矢部長克と後輩・鹿間の後方の国立中央博物館にあって不離一体であった。戦後の著書『原人発掘――一古生物学者の満州25年』（春秋社、1965年）の表紙装丁に、熱河竜足跡化石のイラストレーションを使っていたことにも、熱河竜と遠藤との浅からぬ関係が感じられる。

単刀直入に言うと、原作における山根とは、遠藤その人がモデルだったのではないか、と思うのである。山根の属性のうち元北京大学教授は、外地の大学教授という点で、留用ながら遠藤の東北大学教授と通じ、古生物学者はそのままに等しかった。1954年の時点で

の山根の年齢55歳が、遠藤より７歳若い点にへだたりを感じるが、娘・恵美子をはじめ、ほかの登場人物の年齢設定との関係からとも思われる。

引き揚げ後の遠藤は、1948年７月からGHQ内の地質調査所に職を得、1949年６月に埼玉大学教授、1953年８月に同大学文理学部長、1954年８月には同大学学長に就いた[48]。映画『ゴジラ』が製作された1954年、遠藤は新制国立大学の大学行政にたずさわるようになり、多忙であったことは容易に想像されるし、本人もそのように書いていた[49]。しかし、映画製作への関与に長時間拘束されなければ、まったく不可能ではなかったであろう。後輩にゆだねたのかもしれない。後輩の研究者も、遠藤にうかがいを立てながらの関与だったと思えなくもない。

ことほどさように筆者は、ゴジラと遠藤の有縁を想像するわけだが、意識するしないとにかかわらず、山根は、香山滋から満洲国の地質古生物学（者）に向けられたオマージュだったのではないか。映画製作にかかわった尾崎と鹿間からは、先輩に向けられたそれだったのではないか。実体としてではなくても、遠藤はオマージュの向けられた先にあることでゴジラにかかわっていた、と考えられはしないだろうか。

ところで、映画『ゴジラ』の山根の容貌が、遠藤に似ることを指摘したのは、岸雅裕であった（付記参照）。岸にしたがい想像をたくましくすると、遠藤に有縁の人たちは、映画を観ながら親しみをこめて、「エンドウ豆[50]先生だ」と心中快哉を叫んでいたようにも、筆者は妄想するのである。

５．ゴジラの構造

明暗の構造

さて、ゴジラの原作から、以上のような理解を導き出すことができたところで、つぎにゴジラの構造をめぐり、注意にのぼったことがらについて触れておきたい。

わが国の博物館の戦後を分析したときに筆者は、1949年に設立された鳥取県立科学博物館（現在の鳥取県立博物館）と1954年開館の横須賀市博物館の所論とを対照して、横須賀市博物館の節を執筆した羽根田弥太の望むところが、「鳥取県立科学博物館に見られたような未来の「いつの日か」の「希望の光輝く時」ではなく、羽根田がパラオ熱帯生物研究所から昭南博物館へと移り、軍の兵器開発にも関与してきた一九四五年以前の「希望の光輝く時」「いつの日か」でしかなかったと言うべきであろう[51]」と書いたことがある。戦後の博物館論は、「未来の栄光＝明」と「過去の栄光＝明」という、「二重の栄光＝明」をはらんでいたのであった。

これと似た構造を、ゴジラの原作にも看てとることができる。原作は、1930年代から1940年代前半満洲国における日本人地質古生物学の「栄光」のうちにあった。それは、満鉄地質研究所が設立された1907年頃からの、満洲・満洲国における日本の植民地科学、その最終段階の「栄光」であり、これが「過去の栄光＝明」となる。それに対し、ゴジラが死滅したのち船団からあがる「歓声[52]」が、「未来の栄光＝明」に相当する。

では、原作の「暗」は何だったか。水爆実験、ゴジラの出現、東京破壊が「暗」であることは、言わずもがなである。そして、ゴジラは闘争に負けて消滅し、水爆実験も「太平洋上で行うべき水爆実験は、すべて完了した旨の発表を正式に公表いたしました[53]」と終

結が明示されて災禍の原因はなくなり、船団の「歓声」すなわち「明」に収斂した。

ほかにはどうか。芹沢の片目失明と顔面の傷の理由が、原作、映画ともに戦争によるものでなかったことは先に見たが、だからと言ってそれがただちに「明」となるわけではない。原作で芹沢の負傷は、「狼におそわれた」ことを理由にしていた。狼に襲われて片目を失い、顔半面ひどい傷を負うとは、いったいどのような状況だったのであろうか。事故は想像を超えることがあるとすれば、あり得たのかもしれない。しかし、当時の社会状況を考慮しつつ想像すると、「狼」とは匪賊の喩えだったのではないかと思われるのである。鹿間時夫は、熱河竜足跡化石発掘現場について、「14年（1939年のこと―引用者注）頃までは匪状悪しく調査不能の地であつたとか聞いてゐる[54]」と書いていた。山根と芹沢がでかけた熱河省の場所がどこであったかにもよるが、「化石採集にゆこう」「はい」と言って、ただいまたとえば岐阜県の瑞浪や金生山にでかけるのとはわけがちがう。1941年、熱河竜の足跡化石を国立中央博物館が収集するため、同館学芸官・野田光雄と同館嘱託・鹿間たちが、現地を往復したときの記録にある困難をみればあきらかである[55]。鹿間が回顧した、ことばの問題もあった[56]。当時満洲国において、関係機関に連絡調整をとりながら、軍や警察の護衛のもと調査がおこなわれることは珍しくなく、1932年には、遠藤の後輩になる東北帝国大学理学部出身の外山四郎のような死者も出ている[57]。そうした植民地科学の現実からすると、山根と芹沢の熱河省化石採集旅行は、牧歌的なものではなかったはずである。

惟うに、匪賊に襲われた山根と芹沢だったが、山根が用意していた銃によって、芹沢の生命は守られた。しかし、片目を失い顔面に傷を負った、というのが原作までの香山滋の構想だったのではないだろうか。それが、原作の時点で隠されて、1930年代から1940年代前半満洲国における日本人地質古生物学の「栄光」のみを背景とするにいたった、と。隠された理由は気になるが、主題は化石にあったため、捨て去られたと解しておきたい。

あるいは、理由は問わず、芹沢の片目失明と顔面の傷があれよかっただけなのかもしれない。芹沢の顔面のようすは、たんに「醜い」ことにおいて動員されていたようにも感じられるからである。それは、前掲引用文の当該語だけでなく、その直後の「巨躯だが、風采はあがらず、醜怪な顔[58]」として、原作でくりかえされていたことによって知ることができる。それ以前の箇所で、恵美子がつくった一個の目玉焼きを前にして、「「さては独眼竜かな。おい恵美子、わしだからいいが、芹沢がやってきたとき、こんなものを出すとひがむぞ、奴はこれだからな」／片目をつぶって、片目を剝(む)いてみせる[59]」と、芹沢を揶揄するくだりもくわえてよい。醜さの動員は、香山の作品に常套であったから、小説の技法以外の意味はなかったと言えなくもない。であるならばそれが、あからさまな、身も蓋もない、身体の障害に対する差別であるがゆえに、それすらも「明」の延長にあったように思えてくるのである。

山根の明暗

明暗の構造は、山根にも見られる。山根は、原作から東京編まで共通して、ゴジラを殺すことに反対する人として描かれていた。しかし、微妙に異っている。原作の山根は、「あれは、この地球上にただひとつ生き残った最後の一匹だ。かけがえのない研究資料だ[60]」「離せッ、わ、わしは、ゴジラを殺したくない。あれはかけがえのない貴重な研究資料だ[61]」とくりかえし叫ぶ、「研究のこととなると半気狂とおもわれるほど偏執的」な研究

資料至上主義者であった。この傾向は、映画で弱まる。そして東京編では、殺さない理由を説明するとき、「――幸いに、この絶好のチャンスが……」「――日本に与えられたのだ。世界中の人々に迷惑をかけた日本人として、この研究を完成させることこそが、そのつぐないをすることのできる唯一の道なのだ[62]」と、「日本」「日本人」をもちだす。さらに、「迷惑」と「つぐない」の指すところがこの文から直接にはわからないが――おそらく日本軍国主義の侵略戦争のことであろう――、倫理的な意味もくくわわる。これらを有さない原作の山根は、形而下に無邪気な研究者であった。資料のことだけを思うという意味において山根は、一点の曇りもない明白さのうちにあったのである。

しかし、山根のこの「明」は最後に失われる。ゴジラとの闘争シーンで、サルベージ作業船かもめ号に乗らず信州に行っていた山根は――東京編で信州は戦時中恵美子の疎開先であったから[63]、ゴジラ禍下に山根は疎開していたのであろう――、ゴジラ死後に避難先から東京へもどってくる群衆のなかにいた。その「おもやつれした姿[64]」とは、古生物学研究のかけがえのない資料を手に入れ損ねた失意のそれであり、本論の課題に照らせば、1930年代から1940年代前半満洲国における日本人地質古生物学の「栄光」の挫折として読みとることができる。

そう言えば、満洲国崩壊によって、在満時代の数万個[65]あるいは約百トン[66]という、貴重な標本を含む、膨大な化石コレクションを失う遠藤隆次がいた。遠藤の名をつけた遠藤獣 *Endotherium niinomii* 化石の報告の機会を、徴兵によって失われ、戦後までまたなければならない鹿間時夫もいた[67]。

顧みると、原作で山根は、サルベージ作業船に乗っていないのである。ゴジラに勝利する側のサルベージ作業船に山根がいないということは、勝利する側から山根が排除されていたことになる。しかも、「わが国古生物学の権威山根恭平博士[68]」であったにもかかわらず、群衆のひとりでしかなくなっていた。この落差は大きい。1930年代から1940年代前半満洲国における日本人地質古生物学の「栄光」は、勝利の「歓声」にとってかえらることが約束されていたかのようなのだ。芹沢もいない。元北京大学教授で、熱河省化石採集の助手として山根にともなった、もう一つの「栄光」も消滅したのである。

満洲国と戦後

このとき、原作において戦後が開始されたのかもしれない。それは、戦前の「明」（満洲国熱河省、山根、芹沢）から、水爆実験およびゴジラの「暗」との闘争と勝利を経て、戦後の「明」（歓声、恵美子、尾形）への転換としておこなわれた。これが原作の要諦である。

原作でゴジラは、「最後の一匹」であった。ゴジラは唯一無二の資料であり、それゆえゴジラの生死は山根に切実な問題であった。しかし『怪獣ゴジラ』で、「第二のゴジラがいつ又現れて来るかもわからない……[69]」と、死んだ芹沢に向けて尾形が話しかけ、映画と同様に東京編では「あのゴジラが、最後の一匹だとは思えない[70]」と山根がつぶやいて、原作での一回性のゴジラは否定され、永続性のゴジラとなった。『怪獣ゴジラ』の尾形は、上のことばに続け、「僕達は、君の生命にかけて再びそれと戦うだろう……有難う、芹沢……[71]」と言い、永続闘争を示唆してもいた。

原作では、ゴジラと水爆実験の「暗」が消失し、これとともに満洲国の「明」も失われ、

「歓声」の「明」が独立自存した。しかし、『怪獣ゴジラ』以降、ゴジラと水爆実験の「暗」は継続され、満洲国の「明」は「歓声」の「明」とともに継続する。ここに、ゴジラ映画とゴジラ論の継続してゆく下地ができたのであり、東京編で明示された日本、日本人、倫理性が理念的にこれを支えてゆく。原作で、満洲国を切断した戦後が、『怪獣ゴジラ』以降、満洲国をひきずる戦後に変わるのであった。

ところで、21世紀になって熱河竜の足跡化石現場を調査した人たちは、「約60年前、先学の方々がこの「廟」を横にみながら、目標にする恐竜足跡現場は今少しだとここを歩いたのだろうと思うと感慨無量であった」、ならびに「60年以上前に活動した日本人研究者たちの感動や苦労などを露頭から感じ取ることができた。また、鹿間教授らの先駆的な恐竜足跡化石研究に感動も覚えた次第である[72]」という文章を、その報告に挿入していた。1954年の原作に見られた「過去の栄光＝明」が、半世紀をへだてた2004年の日本人研究者の、一点のかげりのない「明」とつながるのを、期せずして発見するのである。

おわりに

最初から可愛いゴジラ

加藤典洋は、映画製作関係者による反水爆、反戦の目的に沿って語られる世のゴジラ論に不満を唱え、ゴジラが人びとに支持され、長く続いてきた理由を、第二次世界大戦の日本人死者の亡霊にもとめて所論を展開した。果たしてそうだろうか。

加藤は、ゴジラ映画の製作回数や観客動員数を分析したが、数以外の観客の反応にまではおよばなかった。この点について、香山滋はつぎのように書きとどめている。

> 本来なら、原水爆を象徴する恐怖の姿だから、こわがってもらいたいところ、逆に近親感を生むという不思議な現象をもたらしてしまった。
>
> 『ゴジラ』が出てくると、観客は笑うのである。声を出して笑わないまでも、クスリと微苦笑するのである。
>
> つまり、漫画的愛嬌をたたえた『ゴジラ』が可愛いくおもえ、どんなに乱暴をはたらいても決して憎めないのである[73]。

「漫画的」というのは、観客の行動に接しておこなわれた香山のゴジラ理解の調整であるため、必ずしもこれにとらわれる必要はなく、観客の深刻でなかったようすが踏まえられれば、ここでは十分である。そうした現実を受けて香山は、「ぼくとしては、原水爆禁止運動の一助にもと、小説の形式を藉りて参加したつもりであったが、これでは全く惨敗に近い[74]」と書いていたのは、印象的であった。これは、映画が封切られた翌年、1955年当時の弁である。

しかし、それから60年後の私たちは、それが決して「惨敗」ではなかったことを知っている。加藤や、加藤が引用した川本三郎、武田徹、赤坂憲雄、そして以上 4 名を引いた笠井潔たちの批評こそが、香山の敗北の「惨敗」でなかったことの証左である。と言うのは、観客は香山を惨敗に追い込んだが、批評家たちは香山らの意図に応答しつつ議論していたのだから――。「その意味じゃ大人用の娯楽映画として確かに成功している[75]」のであった。

ゴジラ論外部の観客において、ゴジラは最初から「可愛いく」、したがって「グッバイ・ゴジラ、ハロー・キティ[76]」はありうべくもなかったのである。

亡霊、台風

ここで、観客の「明」とゴジラ論の「暗」という二項が立ちあがるのを見る。そして、加藤典洋の言う戦死者の亡霊と、観客の「明」とが接続して、ゴジラ映画の人気が成ったということも。しかし、亡霊は明るいのだろうか。

加藤は、「ゴジラは、なぜ南太平洋の海底深く眠る彼の居場所から、何度も、何度も、日本にだけ、やってくるのか」と問い、「その理由は、ゴジラは、亡霊だからである[77]」と続けた。戦死者の亡霊が日本に向かうということについては、映画『キングコング対ゴジラ』で重沢博士が、記者に向かって言った帰巣本能――「そう。動物がみんなもってる帰巣本能。つまり、生まれた巣は忘れないっていう本能だよ」――に還元できる。亡霊も日本にもどるのであり、概念的には既出であった。しかし、その帰巣本能は、ゴジラ映画3作目にはじめて登場するもので、「生まれた巣」が日本であることを原作と2作目は言っていない。亡霊の再来性の根拠は、もともとはなかったのである。

では、再度「ゴジラは、なぜ南太平洋の海底深く眠る彼の居場所から、何度も、何度も、日本にだけ、やってくるのか」。加藤のこの問いを眺めながら筆者は、「その理由は、ゴジラは、台風だからである」とつねづね思ってきた。

有史以前より日本列島に棲息してきた人間の経験にとり、南方からくりかえしておとずれるものは台風である。弥生時代の日本列島におとずれた台風の証拠、花粉化石も知られている[78]。台風を考慮して、日本列島の住民はその家屋敷を構築してもきた。

毎年おとずれては、猛威をふるい、じきに去る台風は、ゴジラの来襲に相応しい。人びとは、台風で倒れた木々や散乱した瓦礫を処理し、傷んだ家屋を修理して、日常を再開する。この景色は、ゴジラの去ったあとのそれに重なる。台風一過とゴジラ一過とは、たいへんよく似ている。では、私たちの経験において、亡霊一過という現象はあるだろうか。亡霊ならば、四六時中私たちのまわりに滞在してよいし、亡霊の側に立てばむしろそうありたい。決して、一過性のことではない。

それでいて加藤の言う亡霊は、1945年前後のいっときの体験に過ぎなかった。ものやことがらは、人びとの経験のうちに累重して、意識無意識にはたらきかける。南方からのゴジラの再来性は、人びとの台風の経験のうちに宿っていたのである。

そして、台風の被害がどれだけ甚大で、どれほど悲嘆に暮れたとしても、人びとは日常に戻る。それを、幾度も幾世代も繰りかえして、注意、警戒しながら台風が過ぎるのを待つ。そうした台風の処方を知るがゆえに、人びとは達観している。それは、ゴジラ東京襲撃を体験した山根の諦念に近い[79]。ここに、観客の「明」が通じると考えても、大過はないと思う。

1948年、民俗学・考古学・歴史学研究者の栗山一夫は、「まず私達の周囲を包んでいる自然的環境をよく視、よく知ること、これから地域研究の第一歩を始めたい[80]」と書いた。「まず地質学的・地理学的な研究から初め、次いで民俗学的・歴史学的な調査に及び、そして経済学的・社会学的な把握に達するという順序で、この地域研究を進行させたい[81]」とも。主題は地域研究にあるが、日本および日本人の現象としてゴジラが存在する以上、

ゴジラは「地域」と言える。然れば、自然環境の考察から進むのは理の当然であった。

さらに、ゴジラ論が 3 ・11で再燃したことをふりかえれば、批評もまた、地震と津波、すなわち栗山の言う自然的環境に、正しく囚われていたのである。

植民地主義の忘却

物質（生物）のゴジラも、精神（小説・映画・批評）のゴジラも、「自然史の存在」であった。これを、「存在としてのゴジラ」と言うならば、作者・香山滋の願った、1954年当時の原水爆禁止運動への寄与とは、「当為としてのゴジラ」と言いうる。加藤典洋の亡霊論も、靖国神社破壊[82]に収斂してゆく「当為としてのゴジラ」であった。

原水禁に寄与せんとしたゴジラは、まがりなりにも国際的であり「暗」から「明」への希求があったが、亡霊論のゴジラは一国的様相を帯び、出口なしの「暗」に籠もっていった観が否めない。上に書いた「地域」としてのゴジラとは、物質的に精神的に日本に幽閉することと同義でない。栗山一夫も、「私のいう地域研究とは、日本を構成する一部分としての郷土、更には世界の一断片としての郷土、それを日本、または世界との有機的な連関に於て捉えようというのだ[83]」と書いていた。出口なしの「暗」の突破口が、靖国神社破壊だったのかもしれないが、そこに原水禁のかわりや国際性への入り口を託していたとすれば、辺境の土俗宗教を、アジア、世界におよぼそうとした植民地主義の、裏返しの再演をそこに観るのは困難でない。

5 章に書いたことをくりかえそう。「原作で、満洲国を切断した戦後が、『怪獣ゴジラ』以降、満洲国をひきずる戦後に変わるのであった」とは、ゴジラ映画とゴジラ論の双方が、植民地主義を自覚せず、等閑に付して継続させたことの別の謂いである[84]。それは、敗者の前史を忘れた、当然の帰結なのであった。

ゴジラは、満洲国における日本人の植民地科学、その有力な中心たる地質古生物学の「栄光」に内在して誕生し、原作の直後に熱河省のくだりが削除されて、この起源は不可視となる。それゆえ、ゴジラに内在して密かに生きることになった。それはまるで、海底洞窟にひそんだゴジラやトリロバイトのように――。以後のゴジラ映画、ゴジラ論が、「南」を突出させて可視化したことも、不可視の満洲国を無傷で生き続けさせる陽動として機能したのであろう。そしてそれが、植民地主義を隠蔽することになっていたならば、南島イデオロギー[85]圏内の事態を知ることにもなるのである。

香山滋の「南」と「北」

香山滋は、「南への憧れ[86]」を隠さない人であったが、ゴジラに「北」を忘れることはしなかった。1 作目で香山は、「南」の大戸島から来たゴジラを、東京湾で抹殺する。2 作目では、「南」の岩戸島から来たゴジラを、「北」の神子島で抹殺する[87]。両作品を通して香山の意を詮索するならば、2 匹のゴジラをして「南」と「北」とを統一せしめ、自身のゴジラをまっとうしたということになるだろうか。

このように、ゴジラが「南」だけのものでなかったことは、香山の 2 作品にあきらかだった。ちなみに、ゴジラ映画 3 作目の『キングコング対ゴジラ』は香山の作でないが、「北」の氷山からゴジラがあらわれる。香山作の前作ラストシーンを受けたのであろう。数は少なくても、ゴジラは「南」から来るばかりではなかったのである。

香山においては、「南」と「北」がパラレルにあったにちがいない。だからこそ、「南」ではない熱河省を原作でとりあげることもできた。それは香山が、自然史と歴史とに平衡する作家だったからではないかと考えられる。

ところで、香山が書いた2作目の「ゴジラの逆襲」は、「雪崩はいつ果てるともなく崩壊をつづけ乍ら、自然の勝利を謳歌しているようである[88)]」と結んでいた。それは、戦闘機のロケット弾攻撃によって引き起こされた人工の雪崩だったが、ゴジラが自然から出立し自然に帰還する――ゴジラ論がものする当為つまり多端な歴史を挿入しながら――という、文字どおり「自然史の存在」としての完全をあらわしていたようにも思えるのである。

ゴジラは、「北」を起源に、「南」からあらわれ、「北」に消えたのであった。

注

1）おもな成果については、犬塚康博『反博物館論序説――20世紀日本の博物館精神史』、株式会社共同文化社、2015年、同『藤山一雄の博物館芸術――満洲国国立中央博物館副館長の夢』、株式会社共同文化社、2016年、を参照されたい。
2）本論における引用は、旧字体から新字体への改変にとどめ、かなづかい、拗促音、句読点、地名、誤脱字などは原文のままとした。年号表記は西暦年でおこない、人名、組織名の敬称は省略し、字体は統一しなかった。地名、学名は当時のものを使用した。また、1945年8月15日を境に戦前、戦後と表記して、戦中の語は用いなかった。
3）香山滋『香山滋全集』別巻（評論・年譜他）、株式会社三一書房、1997年、428頁。
4）笠井潔「3・11とゴジラ／大和／原子力“ニッポン”イデオロギー批判」笠井潔・巽孝之監修、海老原豊・藤田直哉編集『3・11の未来　日本・SF・創造力』、株式会社作品社、2011年、11-24頁、参照。
5）笠井潔・巽孝之・山田正紀「［鼎談］3・11とSF的想像力」、笠井潔・巽孝之監修、海老原豊・藤田直哉編集、前掲書、30-31頁、参照。
6）笠井潔、前掲論文、11頁。
7）髙橋敏夫「ゴジラ・怪獣たちの戦後　立ちあがる“過去”」『多様性の秩序　批評の現在』、1985年、株式会社亜紀書房、67-72頁、同『ゴジラが来る夜に』、廣済堂出版、1993年、同「ゴジラ的嫌悪について」『嫌悪のレッスン』、株式会社三一書房、1994年、6-8頁、同『ゴジラの謎――怪獣神話と日本人』、株式会社講談社、1998年、同『ゴジラが来る夜に　「思考をせまる怪獣」の現代史』（集英社文庫）、株式会社集英社、1999年、参照。
8）同『ゴジラが来る夜に』、227頁。
9）竹内博「解説　香山滋と東宝特撮映画」香山滋『ゴジラ』（ちくま文庫）、株式会社筑摩書房、2004年、446頁。
10）香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、株式会社三一書房、1997年、419頁。
11）同『香山滋全集』第7巻（怪獣ゴジラ）、株式会社三一書房、1994年、382頁、参照。
12）同『香山滋全集』第14巻（魔空要塞）、株式会社三一書房、1996年、139頁、参照。
13）遠藤隆次『改訂増補　満洲の地質及鉱産』、株式会社三省堂、1939年、152-166頁、同『原人発掘――一古生物学者の満州25年』、春秋社、1965年、34-37頁、参照。
14）Cf. Endo, Riuji, and Shikama, Tokio, “Mesozoic Reptilian Fauna in the Jehol Mountainland, Manchoukuo”, *Bulletin of the Central National Museum of Manchoukuo*, 3, 1942, pp. 1-19.
15）Cf. Shikama, Tokio, “Footprints from Chinchou, Manchoukuo, of *Jeholosauripus*, the Eo-Mesozoic Dinosaur”, *Bulletin of the Central National Museum of Manchoukuo*, 3, 1942, pp. 21-31.
16）香山滋『香山滋全集』別巻（評論・年譜他）、340頁、参照。
17）たとえば、鹿間時夫「熱河恐龍足跡化石発掘記」日本砿物趣味の会編『我等の砿物』第10巻第9号、日本砿物趣味の会、1941年、375-387頁、野田光雄・鹿間時夫「熱河恐龍の足跡化石に就いて」『科学』第11巻第12号、株式会社岩波書店、1941年、474-478頁、がある。
18）香山滋『香山滋全集』別巻（評論・年譜他）、441頁。
19）同書、442頁。
20）同書、413頁。
21）同書、413頁。
22）同『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、404頁、参照。

23）同書、414頁。
24）同『香山滋全集』第 7 巻（怪獣ゴジラ）、341頁。
25）同『香山滋全集』第14巻（魔空要塞）、132頁。
26）同『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、407頁。
27）同書、407-408頁。
28）同書、408頁。
29）同書、405頁。
30）このシーンは、海岸を俯瞰し、ゴジラが進んでいった方向を後方から見ていたが、映画『ゴジラ』の 2 年後に刊行された *All About Strange Beasts of the Past* が、アメリカ自然史博物館に展示される The Glen Rose Trackwayの恐竜足跡化石のイラストレーションを、やはり後方から描いており、足跡を見せる定型が知れる。Cf. Andrews, Roy Chapman, *All About Strange Beasts of the Past*, Vol. 17, Random House, 1956, p. 21.
31）香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、412頁。
32）鹿間時夫「錦州省内に於て発見されたる古期中生代恐龍 *Jeholosauripus* の足跡に就いて」『満洲帝国国立中央博物館論叢』第 3 号、満洲帝国国立中央博物館、1942年、31頁。
33）土田定次郎編（代表）『窮亦楽通亦楽　遠藤隆次思い出の記』、遠藤律、1970年、参照。
34）Cf. Endo, Riuji, and Resser, Charles Elmer, “The Sinian and Cambrian Formations and Fossils of Southern Manchoukuo”, *Manchurian Science Museum Bulletin*, I, 1937.
35）遠藤隆次編『教育参考館陳列品目録（昭和十一年十二月十五日現在）』、南満洲鉄道株式会社教育研究所、1937年、参照。同書「節足動物／三葉虫類」（27-62頁）は本文216頁のうちの16％を占めている。すべて、遠藤隆次の寄託品である。
36）木場一夫編『国立中央博物館大経路展示場第 1 次列品目録』、国立中央博物館、1940年、参照。
37）土田定次郎編（代表）、前掲書、147-148頁、参照。
38）おなじシーンに登場するもうひとつの話題「ビフルカタス層の赤色粘土」（香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、417頁）については、次の記事に接した。ムラカミ・ヒロミ「黄色い部屋の片隅で（ミステリ・アーカイヴ）第九回　香山滋と横山又次郎」（Web冊子「定有堂ジャーナル」）http://homepage2.nifty.com/teiyu/journal/mura_0409.html（2012年 4 月26日）。ビフルカタス層は、「粘土」のほかに「岩滓」「砂」という表記もおこなわれている。粘土と砂は分類学的に異なり、香山の意を知ることができないが、恐竜足跡化石、赤色、岩滓、砂の四つのキイワードに着目すると、熱河竜の報告が参考に掲げた、類似する足跡化石が山西省と陝西省の赤色砂岩層（三畳系乃至侏羅系）から見つかっているとする記述に注意が向く。香山はこのくだりに触れていたのではないだろうか。鹿間時夫「熱河恐龍足跡化石発掘記」、387頁、野田光雄・鹿間時夫「熱河恐龍の足跡化石に就いて」、478頁、参照。
39）鹿間時夫『石になったものの記録』（角川新書147）、角川書店、1960年、221頁。
40）矢部長克、稲井豊、鹿間時夫「満洲国錦州省羊山より発見されたる中生代恐龍の足痕化石」『地質学雑誌』第47巻第559号、日本地質学会、1940年、169-170頁。https://www.jstage.jst.go.jp/article/prpsj1935/1940/17/1940_17_27/_pdf（2016年 4 月 9 日）。
41）野田光雄・鹿間時夫「羊山産恐龍足跡発掘経過報告」『国立中央博物館時報』第12号、国立中央博物館、1941年、8-19頁、鹿間時夫「熱河恐龍足跡化石発掘記」、375-387頁、野田光雄・鹿間時夫「熱河恐龍の足跡化石に就いて」、474-478頁、鹿間時夫、前掲書、180-181頁、参照。
42）尾崎博「私のたどった博物館歴／「生物の進化」の展示が生まれるまでのメモ」国立科学博物館編『自然科学と博物館』第37巻第11～12号、国立科学博物館、1970年、241頁。
43）国立科学博物館編『国立科学博物館百年史』、国立科学博物館、1977年、518頁。
44）尾崎博、前掲論文、247頁。
45）同論文、241頁。
46）香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップR）、421頁。
47）尾崎博、前掲論文、246頁。
48）土田定次郎編（代表）、前掲書、参照。
49）同書、167頁、参照。
50）犬塚康博・大森直樹「元日本語教師が語る「満洲・満洲国」教育の実態――山田弥貴氏へのインタビュー記録――」「満洲国」教育史研究会編『「満洲国」教育史研究』第 2 号、東海教育研究所、1994年、120頁。
51）犬塚康博『反博物館論序説――20世紀日本の博物館精神史』、177頁。
52）香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、435頁。
53）同書、435頁。

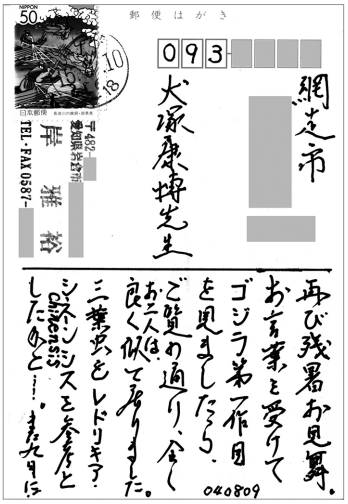
54）鹿間時夫「熱河恐龍足跡化石発掘記」、375頁。
55）野田光雄・鹿間時夫「羊山産恐龍足跡発掘経過報告」、8-19頁、参照。
56）鹿間時夫、前掲書、180-181頁、参照。
57）遠藤隆次『改訂増補　満洲の地質及鉱産』、136-137頁、参照。
58）香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、419頁。
59）同書、415頁。
60）同書、426頁。
61）同書、427頁。
62）同『香山滋全集』第14巻（魔空要塞）、157頁。
63）同書、121頁、参照。
64）同『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、435頁。
65）遠藤隆次『科学者の視野』、満洲帝国教育会、1942年、92頁、参照。
66）同『原人発掘――一古生物学者の満州25年』、（まえがき）1頁、参照。
67）鹿間時夫、前掲書、9-16頁、参照。
68）香山滋『香山滋全集』第11巻（ペット・ショップ・R）、420頁。
69）同『香山滋全集』第７巻（怪獣ゴジラ）、441-442頁。
70）同『香山滋全集』第14巻（魔空要塞）、184頁。
71）同『香山滋全集』第７巻（怪獣ゴジラ）、442頁。
72）東洋一・藤田将人「中国遼寧省朝陽県羊山の恐竜足跡化石産地探訪記」『福井県立恐竜博物館紀要』４号、2005年、48頁。https://www.dinosaur.pref.fukui.jp/archive/memoir/memoir004-045.pdf（2016年４月８日）。
73）香山滋『香山滋全集』別巻（評論・年譜他）、434-435頁。
74）同書、435頁。
75）城昌幸・渡辺啓助・高木彬光・香山滋「探偵作家の座談会／科学空想映画「ゴジラ」を観て」香山滋『ゴジラ』（ちくま文庫）、261頁。
76）加藤典洋『さようなら、ゴジラたち――戦後から遠く離れて』、株式会社岩波書店、2010年、183-207頁。
77）同書、148頁。
78）那須孝悌「弥生時代の台風――シダ植物 *Stenochlaena* の胞子化石」大阪市立自然史博物館編『Nature Study』Vol. 23, No. 10（通巻281号）、大阪市立自然史博物館友の会、1977年、110-112頁、参照。
79）香山滋『香山滋全集』第14巻（魔空要塞）、191-194頁参照。
80）栗山一夫「地域研究のすすめ」民主主義科学者協会編『歴史評論』第３巻第４号、歴史評論社、1948年、42頁。
81）同論文、45頁。
82）加藤典洋、前掲書、173頁、参照。
83）栗山一夫、前掲論文、40頁。
84）加藤は、大日本帝国によるアジア諸国の蹂躙を言っているが、映画のシーンに関して「何となく」と書くように、具体的な根拠からの帰納と言うよりは、その想像力からの演繹として評価される。加藤典洋、前掲書、157頁、参照。
85）村井紀『新版　南島イデオロギーの発生』（岩波現代文庫　学術122）、株式会社岩波書店、2004年、参照。
86）香山滋『香山滋全集』別巻（評論・年譜他）、362-364頁。
87）映画の台詞は、神子島上空を北緯53度東経148度と言う。現実の、ロシア連邦サハリン州ネフチェゴルスク東方約338kmのオホーツク海上にあたる。興味深いのは、大阪をあとにしたゴジラが北方の海にあらわれたとの報せを受け、月岡機がゴジラを捜索するシーンである。機の現在地が「北緯50度東経147度30分」と無線で告げられると、北海道支社で交信するオペレータの秀美は「もうすぐよその国じゃないの」と言う。東経はさて措き、北緯50度とは戦前の日本とソ連との国境線であり、このくだりはゆえなきものではなかったのである。映画を小説化した「ゴジラの逆襲」は、経緯度の数値を記さずに「〇〇」であらわし、原作も散逸したらしいため、香山の意は不明だが、ゴジラの戦前的自明がここまでおよんでいたのかもしれない。
88）香山滋『香山滋全集』第14巻（魔空要塞）、228頁。

付記　筆者のゴジラ体験は、3 作目の『キングコング対ゴジラ』（1962年）からである。2 作目『ゴジラの逆襲』（1955年）のときは生まれていない。その『キングコング対ゴジラ』は、本文で書いたように北方から始まっていた。氷山からあらわれるゴジラが、筆者の原体験である。こののちのゴジラはほぼ一貫して南方の存在であり、それに親しんでもきたが、氷山のゴジラが筆者の脳裏から消えることはなかった。南方の海ではないゴジラが、本論の動機である。

2004年夏、1 作目の『ゴジラ』を衛星テレビでみた。くだんのシーンが注目されることとなり、その感想を岸雅裕氏に電子メールで伝えた。岸氏は、名古屋市博物館、愛知文教大学での筆者の上司であり、古事記・日本書紀研究をプライマリな専門とし、さらに近世の出版文化研究へと進んで、地質古生物学にも通じる多才な研究者であった。このとき氏は、即座に書簡を届けられ、遠藤隆次（撮影1940年 7 月15日、当時48歳）と志村喬扮する山根恭平（撮影1954年、当時55歳）の相貌の類似と、映画に出てくる三葉虫がレドリキア・シネンシス（*Chinensis*）を参考にしたのではないかと教示された（写真参照）。

そして、2011年 3 月11日以後、再燃するゴジラ論に接して、筆者も考えを進めるべく2012年 2 月から文献調査をおこなった。そして、その年の12月になって、岸氏が 3 月30日に63歳の若さで亡くなられたことを知らされる。筆者が、ゴジラの調査に着手していたちょうどそのころ、岸氏は病と闘い、逝去されていたのであった。調査は中断し、こんにちにいたってしまった。

岸雅裕氏に受けた学恩と、本論執筆に際していただいた岸正子氏のご高配に、心から感謝申し上げます。



岸雅裕氏書簡（2004年 8 月10日消印）